図書館ニュース

No. 6
1967
42・10・10・発行
発行人 園田 義道

発行所 東京都文京区白山5丁目28番の20号 東洋大学附属図書館

奈良絵本『小式部』の一部

新図書館への期待

工学部分館長 平野 耿

紆余曲折の末、どうやら八十周年記念図書館の建設予定地も目鼻がついたようである。次には川越分館の建築も予定されているとか聞く。いずれ工学部建築学科の手になる斬新な設計図が披露されることであろう。

ことあたらしく言うまでもなく、大学図書館は、大学の研究と教育の中心であるとともに、知的雰囲気のシンボルにほかならない。今や図書館の内容と機能から、大学そのもののアカデミックなレベルが問題とされる時代がおとづれようとしている。

一部の好事家は別として、出版文化の洪水の前に、個人の蒐書能力はごく限られたものでしかありえない。まして日進月歩の学問・技術に追いつくためには、強力で能率的な文献情報を提供してくれたり、迅速な複写サービスをしてくれる機関がぜひとも必要である。このように積極的な図書館の機能に頼る以外には、われわれが今後十分な研究と教育を続けていくことはできないであろう。

教授陣とならぶ大学の頭脳である以上、図書館がキャンパスで最も豪華な施設であって少しも不思議ではない。なによりもそこは、教職員や学生が、自然と足をむける魅力的な場所であってほしい。

幸いにしてわれわれは、こうした理想的な図書館づくりをすることができる機会を与えられている。建築準備委員以外の方々からも、貴重なアドバイスが多数寄せられている。館員諸君も、新館運営の準備と研究に余念がない。この際ぜひとも、当局の理解と、全学の教職員、学生諸氏の応援をえて、次代の人々から批判されないような、立派な新図書館を完成したいものである。

工学部附属図書館の蔵書について

大越　諄

私は、図書館学について、全くのしろうとである。しかし、私は私なりに、工学部附属図書館には少くとも三つの使命があり、その蔵書の選定方針には、文科系学部附属のそれとは多少趣を異にした点があるべきだ、と考えている。

附属図書館の第一の使命は、重要文献の安全保管である。この使命は、一般の図書館についても言えることである。これは、大学の二大使命である研究遂行と学生の教育とには直接関係がないので、この点には触れないことにする。

第二の使命は、大学で行なわれる研究遂行に協力することである。この使命を達成するためには、各分野の専門図書・学会誌・学術雑誌類を完備していることが、絶対に必要である。

ところで、工学に関する専門図書は文科系の場合と異なり、古い図書は余り役にたたない。研究を推進するために必要な図書は、通常出版後せいぜい十年以内のものである。しかし、学会誌・学術雑誌などは、これと趣を異にする。いつの時代にも、最も重要な研究の成果は、まず学会誌類に発表されるのが普通である。したがって、学会誌類に掲載された研究論文を年代順に調査すれば、それだけでも、その分野の学問が今日までにどのように進歩して来たかを察知できるし、今後の発展の方向も推察できると言うものである。それ故、学会誌類は専門図書と異なって、相当古いバックナンバーも非常に価値がある。

第三の使命は、学部学生の勉学に協力することである。この点において図書館は、学生にとっては、直接指導を受ける教員と同様に、よき相談相手である。したがって図書館には、学生の勉学に適切な図書を完備しておく必要がある。しかし、それ等の図書は、研究用の図書のごとく、必ずしもその分野の最高レベルの学問を記載したものである必要はない。むしろ、講義室・実験室でよく了解し得なかった点を、自習によって会得し得る程度のものであればよい。ただし、大学院学生に対しては、話は別である。

米国の多くの大学は、講義後に必ず同一時間の自習時間を設け、なるべく全学生に図書館で自発的に勉学せしめているが、そのためには、多種類の参考書を、しかも同一の参考書を、相当数揃えておくことが絶対に必要となる。

よく、図書館には同一図書を二冊以上備えるよりは種類を殖やすべきだとの声を聞く。これは多くの場合、経済上の理由によるものであるが、学生の自習用参考書に関する限り、この方針は通用しない。

（工学部長）

分館だより！

一冊の図書が利用者の手許に届く迄には、いろいろの過程を経ますが、分館で受入された図書は、本館行きの車に乗せ、分類、目録、印刷、コピー等の整理作業を本館で行ないます。その運搬車も今迄は他の車に一緒に便乗させて戴きましたが、今度から週一回専用車を依頼できましたので、仕事も能率的に捗る事と思われます。このように整理されても、実際の研究の為に、不便のないよう利用に供されねばならない使命を感じています。

緑に囲まれた工学部の長い夏休みも終りに近く、燈火親しむ季節になり、尚一層図書の利用も多くなる事でしょう。昨年は教養関係図書、人文社会科学系の図書が数多く入りましたので、専門の勉強のみならず学生時代に大いに読み、巾の広い知識を吸収して、心の糧を豊富に得るよう願っています。

静かな環境の工学部も、来年には、教養課程がこちらへ移転する事が確定されましたので、穏やかな鯨井村も、一段と、賑やかになり、活気に満ちた学園に変わることでしょう。それに伴い、分館でも、新しい図書の増加、書架、図書室の拡充、管理する人間の増員といろいろな面で問題が当然生じる事になり、その為の準備にこれから多忙になるでしょうが、日々の仕事のみに追われず、未熟ながらも利用しやすいよう努力したいと思います。近い将来、新図書館建設を期待すると同時に、現在の環境を一歩一歩歩みつつ、少しでも皆様のお役に立つよう館員一同頑張りたいと思います。

分館員　柴　富子

研修会関係

東京都私立短期大学研修会
42.7.21～7.22　私学会館
（出席者：前田，伊藤，笹淵）

私立短大図書館担当者研修会
42.7.27～7.31　高野山大学
（出席者：望月課長，池田）

第七回大学図書館司書研修会
42.8.28～8.31　私学会館
（出席者；山内課長，島田，栗沢）

私立大学図書館協会東地区部会
42年度　第一回研究部会
42.9.1　成蹊大学
（出席者：園田館長，梅沢）

司書研修会報告

第七回大学図書館司書研修会は八月二十八日から三十一日までの四日間、私学会館で開かれた。参加校六九校、出席者一一一名、主催者側の話しでは例年に比べ若くてはじめての人が多いとか、東洋大学から和田先生、山内整理課長、島田、栗沢が参加した。初日は矢次事務局長の開会の辞、稗方会長の挨拶の後、矢次事務局長の「私立大学の充実強化と国の文教政策について解説」高井委員長の「図書館委員会の活動現況と今後の活動方針並びに図書館界の動向について」の報告があり、続いて書物研究家庄司浅水先生の「図書と印刷の歴史」という講演が行なわれた。書物の歴史、書写の材料、紙の歴史、印刷の発見、世界最古の現存印刷物等について珍書、スライドを使っての話しでした。二日目は国立図書館短期大学の木等清一先生の「目録作業の問題点」―アングロアメリカ図書目録規則の改正点について―の講演が行なわれた。改訂になった理由、改訂の歴史、記入の選択、標目の記入等で、たとえば標目の記入のところで、人名でも団体名でも慣習的に取り上げられているのがあったらそれを取るということであった。その後三日目にかけて、商業・会計・簿記、建築工学、国文学、日本史、化学、仏語・仏文学、体育・運動、生物学、哲学関係の書誌に関する班別研究発表の後、それに対する討議が行なわれたが、どの書誌についても勉強の深さには感心しました。続いて各大学提案問題に関する意見交換、実情交換の班別討議を行なった。班別討議の結果報告並びに全体討議を行なって三日目を終った。最終日は見学研修で、成蹊大学図書館は今年春に開館したばかりで地上四階の建物は、一階は視聴覚室、録音室、暗室、マイクロリーダ室、二階は閉架室、目録コーナ、出納カウンター、整理室、三階は学術雑誌整理室、館長室、学術雑誌室、学科研究室、四階はすべて教員研究室で四十五室あり、将来は五階が増築される予定。学生数三学部で四千人、将来は五千人になる予定、閲覧者席数五百席、L・L教室席数四八席、収蔵能力三十万冊（現在一五万冊、年間一万冊のわりあいで増加）。一方、日本近代文学館は駒場公園の一角にあり明治以来の日本の近代文学の資料を一堂に集め研究者のために役立つようにとしたもの、地上三階、地下二階、四千二百平方メートルの建物は書庫、資料室、閲覧室、研究室、ホールを持ち、展示室には芥川竜之介の原稿、書簡、夏目漱石の書簡、広津和郎の松川事件の全資料、鈴木茂三郎の「社会文庫」などの貴重な資料があった。一階と地下には五十万冊も入る書庫があり、蔵書数は図書七万冊、雑誌六万冊、資料五千点、この中には故高見順の蔵書四万五千冊も含まれていた。

この研修会を通じて時間的にいささかきついところもあったが内容の充実したものでした。この研修の成果を日常の業務、勉学に生かしたいと思っています。

（栗沢記）

昭和42年度私立大学研究設備助成補助金決まる

昭和42年5月27日付で，図書設備助成補助金を文部省に申請したところ，今回9件444万円の内，6件345万円が補助金として，下記の通り下附の内定通知を受けたので，ここにお知らせ致します。

研究設備名	数量	申請場所	配分額
Journal Asiatique and other 2 sets	3セット	文学部史学科研究室	460千円
Speculum; A Journal of Mediaeval Studies other 2 sets	3セット	〃	500千円
Patrologia. Graeco-Latina. ed. J. P. Minge	30冊	文学部哲学研究室	200千円
Report of Annual Trade Union Congress	1セット	経済学部研究室	630千円
American Political Science Review and other 3 sets	4セット	法学部研究室	930千円
Zeitschrift für Ausländisches und Internationales Privatrecht & other 1 set	2セット	比較法研究所	730千円
計	6点		3450千円

貴重書から

奈良絵本『小式部』解説（表紙図版参照）

平安時代の中頃、一条天皇の御代（九八七―一〇一五）は、赤染衛門・清少納言・紫式部・和泉式部などの才女達が輩出した時代で、王朝女流文学の最盛期であった。その中でも抒情歌人として知られている和泉式部には、和泉守橘道貞との間に小式部が生まれた。その後和泉式部が為尊親王と恋愛事件を起したのが原因で、道貞とは離婚したが、娘は母親の方に引き取られて生育したらしい。しかるに親王は程なく薨じたので、式部は世の無常を歎きわびていると、一年足らずのうちに、親王の弟宮たる敦道親王に求愛されるに至り、そこでまた弟宮との新たな恋愛が生じた。そこからの恋愛事件の経緯を書いたものが『和泉式部日記』である。そして、ようやく宮と結ばれはしたものの、四年後には弟宮にも先立たれて、またもや孤独な時がやって来た。やがて一周忌も過ぎ、彼女は、紫式部が宮仕えしていた上東門院彰子の許に出仕するようになったのは、おそらくその翌年頃であり、また娘の小式部も同じ宮家に出仕したようである。その時小式部は十二、三才の少女時代と推定されている。その呼び名小式部は、母親の名にちなんだものであろう。内侍をつけて呼ばれているのは掌侍（ないしのじょう）であったとも見られるが、詳しいことはわからない。程なく和泉式部は、道長の家司藤原保昌と再婚して、夫の任地丹後国へ下った。娘は同僚の大輔命婦に托され、都にとどまって宮仕えを続けていたようである。ある時、小式部は宮中の歌会の歌人に選ばれた。母親の歌才をうけて、歌にも優れていたことが認められたからであろう。ところが大納言公任の息子定頼が、小式部の歌の名声は母親の代作のお蔭であろうと思って、彼女のところへ行って、今度の歌合の歌について、丹後への使いはまだ帰りませんか、どんなに待遠しいことでしょう、とからかった。ところが小式部は即座に「大江山幾野の道の遠ければまだふみも見ぬ天の橋立」と詠んだので、定頼は驚きあきれて、足ばやに逃げ去ったと伝えている。これで彼女の歌は母親の代作だとの疑いも晴れ、この話は一躍有名な歌語りとして喧伝されるに至ったのである。その時の小式部は十五才位だったという。その後、藤原教通や公成などに相ついで愛せられ、公成の子を産んで間もなく、二十六、七才の生涯を閉じた。短命に終ったことが、彼女にとってはすばらしいことだと、鎌倉初期の『無名草子』の作者は書いている。これは若死をした作者を惜しむ気持を表わしたものである。

中世になると和泉式部や小式部内侍を題材としたお伽草子がいくつも書かれた。ここに紹介する「小式部」もその一である。その内容は、主として小式部の歌才を讃美したものであり、彼女の歌徳を表明する歌語りなどから成っている。例えば、小式部が九才の時、母親が夜半のうたたねに昔を思い出して、

山里も寝られつるかなよもすがら松吹く風におどろかされで

と口ずさむと、娘の小式部がこれを聞いて、

山里は寝られざりけりよもすがら松吹く風におどろかされて

と詠まれてはいかがです、と直したので、母親はつくづくうち誦して感心したという。もちろんこれは作り話で、史実によるものではないが、「大江山」の歌やその他、小式部の歌詠をめぐっての説話には事実に基づくものもあるようである。そのような話がこの草子には六話ばかり語られている。そして和歌の徳で神仏をも感応納受させたという歌徳説話に仕立てられたものもあって、知識・教養の低い室町時代の婦女子向きに興味深く、しかも娯楽と啓蒙を兼ねて作られた大衆的読物である。

本学図書館所蔵の「小式部」は短篇ながら二帖から成り、故島津久基博士旧蔵本の一で、書型は縦十七cm、横十二cmの小形本で、鳥の子紙の厚紙薄茶地に金泥で菊水模様が描いてある表紙に、「小しきふ」という外題が貼ってある。枚数は上十枚、下十一枚で、終りに「居初氏女書画」とあるから、江戸時代の初期に居初氏の娘が、前代の作品を書写して、それに自ら画も描いたものである。この挿画は上巻に五頁分、下巻に三頁分ある。こうした挿画の入った書物は、絵巻物すなわち平安後期から鎌倉期にかけて発達した書・画・詞章の三つが一体になった特殊な芸術の流れをくむものであって、絵巻物を非常に簡単にして、冊子に仕立てたものがこの奈良絵本である。したがって、このような物語草子は、人の読むのを聞き、挿画を見ながら鑑賞したものである。

ここに掲げた図版は、下巻の終りの部分で、小式部が風邪から重い病に臥して弱りゆくのを、母和泉式部が傍に添い居て、嘆いている場面である。その時小式部はわづかに眠を見開き、母の顔をつくづくと見て、「いかにせん行くべき方も思はえず親に先立つ道を知らねば」と詠じたところ、天井から神の感動した声が聞え、病が本復したという。かくて一首の歌に感応の神の御告げがあったことは、有難い行末と、永く栄えたと結んでいる。

文学部教授　吉田幸一

蔵書の中から

ピエール・ベール『著作集』
Pierre Bayle (1647～1706): Œuvres Diverses.

最近、ディドロの『百科全書』を始め、十七・十八世紀の稀覯本のリプリントが盛んだが、ここに紹介するピエール・ベールの『著作集』も、一七二七年にオランダのヘーグで出版されたイン・フォリオ四巻本のリプリントで、各巻平均九百頁、8ポ二段、七四行ベタ組みの非常な大冊であり、主著の『歴史的批判的辞典』(イン・フォリオ二巻)を除いた全著作が収録されている。

トゥルーズの近く、カルラという小さな町の、プロテスタントの牧師の家に生まれたベールは、二二才でカトリックに改宗したが、翌年すぐプロテスタントに戻り、二八才の時スダンのアカデミーで哲学の講座を担当する。一六八〇年十二月にヨーロッパの空を飛び、当時の民衆を深い恐怖に陥し入れた彗星に関し、こうした天体現象が何等不吉な前兆とはならぬことを、道徳、政治、歴史の諸問題についての考察を添え、哲学的、神学的に証明するため、『彗星論』を執筆する。併し、ルイ十四世によるユグノへの圧迫を始め、遂には、信教の自由を奪う八五年のナントの勅令の廃止にいたるフランスの状勢では、パリでの出版というベールの希望はかなえられず、結局、八一年七月のスダンのアカデミーの閉鎖、十月末のオランダのロッテルダムへの亡命の後、この著作は八二年に匿名で出版され、翌年、『彗星に関する随想』と改訂されて決定稿となる。これに、スダンでのかつての同僚ジュリューその他への反論である九四年の増補、一七〇四年の『続篇』を併せたのが、『著作集』第三巻前半四百頁である。宗教問題を最重要視したベールは、偏見や宗教的迷信を非難し、奇蹟的前兆を信ずるキリスト教徒を偶像崇拝者と同一視して、こうしたキリスト教徒の道徳上の諸概念を無神論者の倫理学に比較し、異教徒の一神話としてのキリスト教義を批判する端緒を開いたのである。無神論者も誠実な人間であり得るし、無神論者の社会の存在も可能であるという二つの命題をたて、当時としては甚だ大胆に無神論者を擁護している。

フランスでの教会事件を主題にロッテルダムで行なった諸著作、即ち、宗教改革の指導者を非難したカトリックの評論家への反論、『マンブール神父のカルヴァン主義の歴史の総批判』(八二年)、プロテスタントを強制的にカトリックに改宗させることに反対した『キリストの言葉「彼等を強制して帰依せしめよ」に対する哲学的註釈』(八六年)、『ルイ大王治世の全くカトリック的なフランス』(八六年)などが第二巻の主な内容である。彼の説いた寛容は、宗教上の『無関心主義』に近く、その主張がプロテスタント主義の利害の限度を超えたため、プロテスタント側からも攻撃され、ジュリューと『亡命者への重大な忠告』(九〇年)などについて論争の結果、九三年には教壇を追われ、文筆生活に専念する。

晩年のプロテスタントの論敵達が、『彗星に関する随想続篇』を、自然主義、感覚主義、無神論だと非難したのに答えるため、一七〇三年以降執筆に専念した大作『或る地方人の質問に対する回答』(四部作、一七〇四―〇七年)が、第三巻後半六百頁を占める。彼にとって哲学は、「或る問題を曖昧なものにする必要があるときは、非常に強いが、何かを解釈する必要があるときは、非常に弱い」ものなのである。第四巻には、小冊子、未発表原稿および書簡が収められている。

ベールはまた、八四年三月からまる三年間、フランス語で、パリを中心とする地域の、科学をも含めた文芸事情の紹介と書評とを目的とする『文芸共和国通信』を発行している。著作集第一巻全巻がこれにあてられているが、この『通信』は十九世紀ジャーナリズムの先駆ともいうべきもので、当時の文芸事情を知る恰好の材料を提供してくれる。ヨーロッパの各都市、特にパリに、その最新の情報を知らせてくれる献身的な友人のあったことが、この『通信』の成功の原因といえる。

九四年以降執筆の『辞典』は、九五年、九七年に増補されたが、本文中に全ての宗派や哲学学説、歴史上の主要な人物の生涯、福音書についてのスコラ哲学の解釈などを集め、欄外に批判的な詳しい註を記し、判断を読者に任せる巧妙な編集方式がとられており、『百科全書』の原型ともいえ、新しい考え方を社会に滲透させるのに役立った。ここでは、以前の『無関心主義』から宗教的懐疑論への移行が見られる。併し『著作集』の出版者が序文で述べている如く、『辞典』がベールより劣る人物の引用文が多数なのに反し、本『著作集』は、彼自身の宗教、道徳、哲学、歴史などについての考えが、より正確に秩序立って述べられており、信仰と理性を明確に対置させ、「いかなるものも明らかに真実と認められぬ限り、真なるものとして受入れぬ。」という、十八世紀の意味での十七世紀の哲学者ベールの姿を十分に伝えているというべきである。

文学部講師　宮　治　弘　之

交換誌一覧（その2）

文化
B—A：1—2：'64—'66
国際基督教大学学報　教育研究
A：1—11：'55—'65
駒沢大学　仏教学紀要
19—22：'61—'64
駒沢大学　宗教社会研究所報
A：1—5：'56—'60
駒沢大学　宗学研究
1—5：'56—'63
駒沢大学　駒沢史学
不定：1—13：'63—'66
駒沢大学研究紀要
14—25：'66—'67
駒沢大学文学部研究紀要
19—25：'61—'67
駒沢大学　駒沢国文
A：3—5：'64—'67
甲南大学　文学会論集
S—A：1—12：'54—'60　欠：5
高野山大学　密教文化
B—M：20—75：'45—'66
熊本大学教育学部紀要　人文科学
A：2—15：'54—'67
熊本大学　熊本史学
A：10—32：'56—'67
欠：11—17，19—30
熊本大学　史料と研究
1：'65
京都大学　独逸文学研究
A：2—15：'53—'67
京都大学　人文
A：2—13：'56—'67
京都外国語大学研究論叢
A：1—18：'58—'66
欠：3，5，6
京都女子大学　史窓
A：16—23：'60—'65
九州大学　文学論輯
A：2—4：'54—'56
九州大学教育学部紀要
A：2—12：'54—'66
九州大学　史淵
S—A：86—96：'61—'66
九州大学　哲学年報
24—25：'62—'64
九州大学　テオリア
A：1—10：'57—'66
九州工業大学研究報告
（人文・社会科学）
A：1—14：'53—'66
明治大学　人文科学研究所紀要
1—29：'55—'65
欠：10—14，20，26，29
明治大学　人文科学研究所年報
2—7：'61—'66
明治大学　教養論集
Q：25—39：'63—'67
明治大学　短期大学紀要
不定：1—7：'57—'62
身延山短期大学　棲神
A：29—39：'53—'66
明城大学　人文紀要
3：'65
三重大学学芸学部研究紀要
S—A：17—34：'57—'66
欠：19，20，22—26
三重県立大学
研究年報（人文・社会）
1/1—4/3：'52—'63
長崎大学学芸学部
人文科学研究報告
A：10—15：'60—'66
長崎大学教養部紀要
人文・自然
A：1/1—6：'61—'66
名古屋大学文学部研究論集
A：5—42：'53—'66
欠：8—9，11，12，14，15，17
名古屋市立大学　人文社会研究
A：8—11：'63—'66　欠：9
奈良教育大学紀要
人文・社会・自然
S—A：1/1—15/2：'51—'67
日本大学　芸術学
A：10—11：'65—'66
日本大学　人文科学研究紀要
A：1—8：'59—'65
日本大学　語文
24：'66
日本大学三島教養部研究年報
1—12：'53—'62
日本大学　桜門
1—6：'58—'60
日本大学世田谷教養部紀要
A：1—6：'52—'57
新潟大学　人文科学研究
S—A：1—32：'51—'66
欠：2—7，17—18
新潟大学教育学部紀要
人文・社会・自然
S—A：1/1—7/2：'51—'66
大分大学学芸学部研究紀要
人文科学
A：13—18：'60—'65
大阪大学文学部紀要
A：2—6：'52—'58
大阪区立大学紀要（人文・社会科学）
A：4—14：'56—'66
大阪外国語大学学報
A：4—16：'56—'66
欠：5，8，9，15
大阪学芸大学紀要（人文・自然）
A：10—14：'62—'66
大阪基督教短期大学　神学と人文
不定：1—6：'55—'66
大阪音楽大学研究紀要
A：1—4：'61—'65
大阪市立大学　人文研究
M：18/1：'67
大阪樟蔭女子大学　樟蔭文学
A：7—14：'55—'62
大谷大学　大谷学報
V. 11—V. 17：'30—'36
Q：33/1—45/3：'53—'66　欠：40/4
大妻女子大学　靖淵
A：1—9：'58—'66
欠：3，4，7，8
立命館大学　立命館文学
M：4—186：'34—'60
欠：147—149，180
立命館大学　大学院論集
1：'65
立命館大学　外国文学研究
A：1—13：'58—'67
立命館大学論究　日本文学
A：5—12：'56—'60
立正大学文学部論叢
A：1—26：'53—'67　欠：3
大正大学　立正学報
A—3：1/1—5/1：'56—'60
大正大学　大崎学報
A：97—121：'50—'66
竜谷大学　仏教文化研究所紀要
A：1—5：'62—'66　欠：3
竜谷大学　仏教学研究
A：2—21：'53—'64
欠：6，10，11
竜谷大学　竜谷史壇
S—A：35—57：'51—'66　欠：36
琉球大学文学部紀要　人文篇
A：2—9：'57—'65　欠：5
琉球大学文理学部紀要　理学篇
A：6—7：'63—'64
佐賀大学　人文紀要
A：s 1—2：'65—'66
西京大学学術報告　人文
A：1—10：'52—'58　欠：3，4
埼玉大学紀要　人文科学篇
A：1—13：'52—'65
埼玉大学教養学部紀要　外国文学篇
1：'66
埼玉大学教養部紀要
1：'66
埼玉大学教養部紀要　人文科学篇
1：'66
成城大学　成城文芸
A—3：1—45：'54—'67
欠：21，22，25，28
成城大学　伝承文化
A：1—3：'60—'62
成蹊大学文学部紀要
1—2：'66
成蹊大学研究報告
A：1—3：'62—'65
西南学院大学　文理論集
S—A：1/1—6/2：'60—'66
西南学院大学　英語英文学論集
S—A：1/1—6/2：'60—'66
滋賀大学学芸学部紀要（人文・社会・教育）
A：3—16：'54—'66
島根大学論集（人文科学）
A：1—16：'51—'66
島根大学　山陰文化研究所紀要
A：1—7：'61—'67
信州大学文理学部紀要
A：1—15：'51—'65
信州大学教育学部研究輪集
人文・社会
A：1—18：'51—'66
松蔭短期大学研究叢書
不定：1—2：'65
種智院大学　密教学

（10頁下段へ続く）

他大学学術関係

本学と他大学との交換誌のうち，図書館では，1967年3月現在，301大学507機関より615種を受入れ，それを総記，人文科学，社会科学，自然科学部門に分け，先回の総記にひき続き人文を記載しました。なお，各研究室宛で直送される交換誌について，またこの一覧の分類記載事項及び逐次刊行物の案内についての御意見をお寄せ載ければ幸です。

（逐次刊行物係　林）

人文科学

愛知大学文学論叢
17—20：'59—'60

愛知学芸大学研究報告（人文）
A：1—15：'52—'66　欠：9

愛知学芸大学
名古屋教育研究所紀要
1：'63

愛知学院大学論叢　禅学研究
ir：1—3：'59—'66

愛知女子短期大学紀要（人文・社会・自然）
1—16：'50—'66

愛知女子短期大学紀要（語学・文学）
1—16：'50—'66

愛知県立大学文学部論集
17：'66

愛知県立大学外国語学部紀要
1：'66

秋田大学学芸学部研究紀要（人文）
A：2—16：'52—'66

秋田大学学芸学部研究紀要（教育）
A：2—16：'52—'66

青山学院大学文学部紀要
A：1—8：'57—'64

青山学院大学　英文学思潮
$3\frac{1}{1}$—$3\frac{4}{1}$：'59—'61

跡見学園　国語科紀要
A：3—15：'54—'67　欠：13，14

梅花女子大学文学部紀要
A：3—12：'55—'63

仏教大学研究紀要
S—A：28—50：'53—'66

千葉大学　文化科学紀要
A：1—8：'54—'66

千葉工業大学研究報告（人文）
S—A：1—9：'62—'67

中央大学　教育学論集
1：'59

中央大学　哲学会誌
A：7—15：'61—'66
欠：—10，12—14

大東文化大学紀要（文学部）
A：1—4：'63—'66

大東文化大学　東洋研究
1—3：'61—'62

電気通信大学学報（人文・社会）
S—A：1—21：'50—'66

同志社大学　文化学年報
A：1—15：'50—'66

同志社大学　人文学
B—M：5—94：'51—'67
欠：7，9，11，12

愛媛大学紀要　人文科学
A：1—2：'60—'61

愛媛大学紀要　教育科学
A：3—7：'56—'60

福岡教育大学紀要（文科篇）
A：3—16：'54—'66

福島大学学芸学部論集（人文科学）
A：2—18：'51—'66　欠：3

学習院大学文学部研究年報
A：2—12：'55—'66
欠：6，8，10，11

岐阜大学研究報告（人文科学）
A：1—14：'53—'66

群馬大学紀要（人文科学）
A：1—15：'51—'66　欠：7，8

花園大学　禅文化
Q：27—44：'63—'67
欠：30—39，41—43

花園大学　禅学研究
A：2—55：'26—'41　欠：1—4，5，23，26，34，39，40，41

弘前大学　文経論叢
Q：$\frac{1}{1}$—$\frac{2}{4}$：'65—'66

弘前大学　人文社会
A：5—12：'59—'66

広島大学文学部紀要
S—A：8—15：'55—'59

広島女子大学紀要（人文社会科学）
A 1—2：'66—'67

一橋大学　人文科学研究
A：7—8：'65—'66

法政大学　法政史学
S—A：9—11：'57—'58

法政大学文学部紀要
A：2—10：'56—'65
欠：3，4，6，7

北海道大学文学部紀要
A：3—6：'54—'57　欠：4

北海道大学
学位論文内容及審査の要旨
14—19：'64—'65

北海道大学　外国語・外国文学研究
A：12—13：'65—'66

北海道大学　人文科学論集
A：3—4：'65—'61

北海道大学教育学部紀要
9：'63

北海道大学教育学部　産業教育計画研究施設研究報告書
2—5：'64

北海道駒沢大学研究紀要
1：'67

北海道教育大学　人文論究
不定期：5—19：'52—'59

北海道教育大学　史流
A：1—7：'58—'66　欠：4，5

北海道教育大学紀要
A人文科学（1，2部）
A：$^{15}\frac{1}{1}$—$^{16}\frac{2}{1}$：'64—'65

岩手大学教育学部研究年報
A：21—26：'53—'65

上智大学　カトリック神学
S—A：1—8：'52—'65

鹿児島大学　文学科論集
A：1—2：'65—'66

鹿児島大学教養部　文科報告
A：1—2：'66

鹿児島大学　史学科報告
A：5—15：'59—'65　欠：10—12

神奈川大学　人文学研究所報
A：1—2：'65—'66

神奈川大学　人文研究
A—3：2—33：'65—'66

金沢美術工芸大学学報
A：2—8：'57—'63

金沢大学　法文学論集（文学篇）
A：2—13：'54—'66

金沢大学　国語国文
2：'66

金沢大学教育学部紀要
B—A：1—2：'52—'54

関西大学　文学論集
Q：$\frac{1}{1}$—$\frac{7}{4}$：'51—'58　欠：$\frac{4}{3}$，$\frac{7}{1}$

関西大学　国文学
7—15：'52—'55　欠：8，10，11

関西大学　史泉
不定：3—33：'55—'66
欠：7—18，27，28，32

関西大学　千里山論集
A：1—2：'63—'64

関西外国語短期大学研究論集
A：1—10：'56—'65　欠：7

関西学院大学
Uninersity Annual Studies
14：'65

関西学院大学　人文論究
Q：$\frac{5}{1}$—$^{17}\frac{7}{4}$：'54—'66
欠：6，7 $^{11}\frac{1}{2}$，$^{17}\frac{3}{3}$，$\frac{5}{4}$，$\frac{6}{1}$，$\frac{7}{1}$・3・4・10

関西学院大学　日本文芸研究
Q：$^{14}\frac{4}{1}$—$^{18}\frac{8}{1}$：'62—'66

関西学院大学　論攷
A：1—3：'54—'66　欠：3

関西学院大学　史学
隔年：1—6：'52—'61

慶応義塾大学　芸文研究
S—A：20—23：'65—'67

近畿大学　芸文
A—3：$\frac{1}{1}$—$\frac{7}{1}$：'60—'66
欠：$\frac{3}{2}$—$\frac{5}{2}$

北九州大学外国語学部紀要
S—A：1—2：'58—'66

北九州大学外国語学部紀要（Ⅱ）
S—A：1—10：'59—'65

神戸市外国語大学
Foreign Studies Panphlet
（外国学資料）
1—17：'57—'66
欠：3—5，8—9，14—15

神戸市外国語大学　研究年報
2—3：'65—'66

神戸市外国語大学　神戸外大論集
B—M：$\frac{6}{1}$—$^{17}\frac{6}{1}$：'55—'67

神戸商科大学　人文論集
$\frac{1}{1}$—$\frac{1}{2}$：'65

国学院大学　日本文化研究所報
B—M：1—19：'62—'67

国学院大学　日本文化研究所紀要
S—A：1—19：'57—'66

国際基督教大学学報　キリスト教と

アメリカの大学図書館

経営学部教授　岩村一夫

イリノイ大学

わたしたちがイリノイ大学を正式訪問したのは九月一一、一二日の両日、シカゴからプロペラ機で約四五分、空港はイリノイ大学の所管と聞いてまずびっくりである。ひとまずリンコルンロッジというモテルでひと休みしてリスのたわむれる森の木々のうっそうとした静じゃく感に、サンフランシスコ以来の都市づかれを癒やしていると大学からキャンパス案内の自動車が若い先生の運転で到着する。

シャンペーンとアーバナの二つの町にわたる五五〇エーカーの校地と約一〇〇の建造物の間を相当のスピードでまわって約二時間、もっともその間に、有名な近代美術館、八万人収容のフットボール場、きのこ形をした一万八千人座席があるといわれる大集会堂なども見る。折から新学期が近いので、自動車で両親たちに送られて寄宿舎入りにしばしの別れを惜しむ愛くるしい情景が見られる。このキャンパスの周辺には、日本の大学街で見られる喫茶店やパチンコ屋は見られない。アルコール類を売る店も食堂もない。目につくのは理髪店とランドリーで、まことに清潔な感じである。

四時から大学の迎賓館ともいうべきユニオンホールでイリノイ大学会計士委員会の代表である E. J. Smith 教授をはじめとし、Oliver 教授、Nelson Young 教授、Moyer 教授、Gray 教授、Warwick 教授らが、夫人ともどもわれわれを迎え、テーパーティが催される。大学で一年交換教授を務められる一橋大の飯野教授、早大から留学中の藤田氏らも大学側としてわれわれを迎えられ、また翌日の午さん会には慶応大学の川田教授、日本に戦後おられた Levine 教授らも参加される。

われわれがイリノイに行なったのは日曜日であったにかかわらず、諸教授や御夫人たちまで動員して歓迎された大学の、学問に対する厚意と情熱には感謝の言葉がなかった。

わたしたちの大学訪問は、イリノイにおける公認会計士の試験制度と大学の教育体制についてであったので、翌一二日朝八時三〇分から、午後二時三〇分までで、がっちりと説明と討論が次の諸教授との間で交わされた。

Charles Warwick（イリノイ会計士委員会委員）イリノイ州における会計士委員会の組織、機能ならびに諸活動

E. J. Smith（会計士委員会事務局長）CPA試験と資格取得に関する諸基準

Horace Gray（経済学教授、会計士委員会の前会長、名誉会長、三四年間委員に就任）イリノイ州における会計士職業の歴史的背景について

Cecil Moyer（会計学教授、会計士委員会委員）イリノイ大学における会計士教育課程の検討

Nelson Young（法学教授、会計士委員会議長）イリノイ州における会計士職業に関する法律と規制

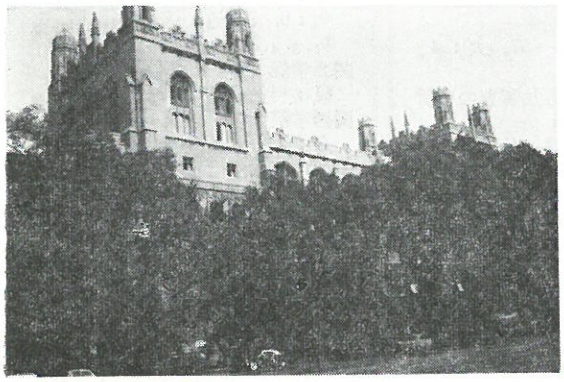
わたしたちの二日留学の目的がこのような会計士に関する事項であって、研究会がぎっしり詰っていたので、図書館などをゆっくり視察する余裕はなかった。それでも正式日程の終了後、飯野先生の案内で、中央図書館、経営商学部の研究室に Zimmer 教授を訪ねたり、電子計算機研究室を見学することができた。

イリノイ大学の中央図書館はキャンパスのほぼ中央にあって、古風の三階建レンガ造と研究室につながる八階建の新築ビルから成っている。

イリノイ大学の蔵書は約三九〇万冊といわれ、三〇万冊がシカゴの医学部などにあるが、その他は全部ここにある。イリノイのコレクションは州立大学では一位、全米大学図書館では第三位、アメリカ全土の図書館では第五位といわれる。

上記の図書館目録書数のほかに、パンフレット類五二万冊、地図及航空写真二九万枚、楽譜類二九万五千、手記類一五万点、新聞雑誌の受入二万二千冊といわれるからおよそ規模の大きさが想察されよう。

アメリカの他の大学に見られると同様に、中央図書館は図書の集収供給体であるとともに、多数の部門別の図書を分散管理している。中央図書館主義というよ



シカゴ大学図書館（法経及東洋研究所）

うな古典的図書管理は古典的歴史的なものには相応しいであろうが、新陳代謝と進歩のはげしい化学、建築学、美術、農芸、技術、地学、経済、ジャーナリズム、コミュニケーション、産業労働関係、法律、数学というように研究センターの異なるものはそれぞれ分割管理がされている。

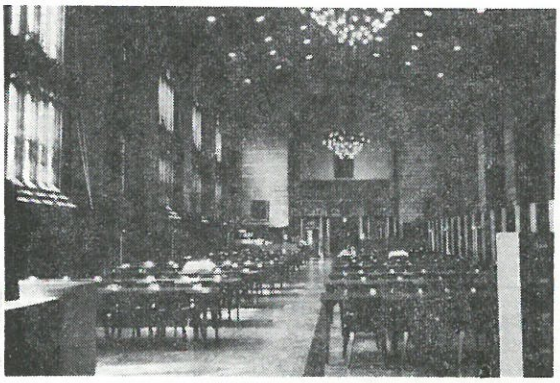
シカゴ大学図書館

シカゴ滞在は九月八日から一一日の朝まで、ここでは大学訪問のスケジュールはなかったが、一〇日午前中のわずかな時間を利用してイリノイ大学から来られた飯野教授とシカゴ大学にでかける。AAAのマイアミ大会でシカゴ大学の教授たちにも会っているが、日程の都合で連絡もできなかったので、急襲したのであるが、土曜日でしかもまだ学期が開始されていないのでドアはかたく閉されている。ようやく図書館をさがして裏階段から入る。

シカゴ大学は一八九〇年にバプテスト宗派の強化のためにカレッヂを統合して建設されたのであるが、今日では、われわれの東洋大学と同様に宗教的色彩を脱した世界有数の大学の一つになっている。

大学はシカゴの南部、わたしの宿ったホテルのある市の中心部から八マイル、自動車でわたしたちは大学近くの黒人街を通って行ったので二〇分はかかったであろう。大学はカレッジと、四つの学部——生物学部、人文学部、自然科学部、社会科学部——七つの専門職業学部——大学院、商学、神学、法学、図書館学、医学、社会管理学——を中心とし、その他公開講座、図書館、博物館、美術館、病院、研究所等を多教管理していることは大学として当然であろう。

わたしが訪ねたのは経営経済図書館、法学図書館と東洋研究所の図書館で、経営経済図書館は蔵書は一七万で、大学の図書館組織のうちでは最大であるといわれる。ドーム式の閲覧室はやや古典的ではあるが広々としていて、二〇〇人は収容されるといわれる。法学部もほぼ同様である。ドームの壁面には各国の大学の学章があって、日本の「大学」の文字も見えて国境を超えた学問の世界を象徴しているように思われた。ここの図書館では土曜日のせいか、図書整理のアルバイトの学生さんが一人でせっせとさばいていた。



シカゴ大学閲覧室まだ休暇中で静かです

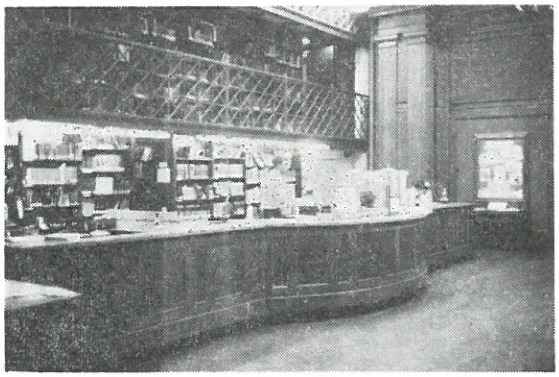
法学図書館の下の地階には東洋関係の図書館があって、ここでは早大出身の小根（Mrs. Fumiko Coyne）さんと、東大を出たという台湾出身の張（Beatrice Chang）さんという二人の女性の方が館内を細かく案内された。日本語で話しのできる気安さで、専門違いではあるが東洋関係の図書と、日本の会計関係の先生がたの本をせっせとさがした。しかしどうも新しいものは比較的少ないので、帰国後できるだけ寄贈すると約しながら、まだ口約を果さないので気になっている。ここの極東関係図書は十七万五千、うち支那と中国十四万、日本三万、その他朝鮮とモンゴールがそれぞれ二千部といわれている。

このほかに多数の専門図書館がそれぞれのカレッジや学部にありハーバー図書館には雑誌、エンサイクロペデア、マイクロフイルム読解室、稀観本、手記本その他貴重図書を所蔵し、各図書館への供給源にもなっている。目下、中央図書館を近代的高層ビルに建設する基礎工事が施行されていたから、もうそろそろできあがるころではあるまいか。

ハーバード大学

古い言葉に、人とレンガとモルタルのいずれに金を投資するかということがあるが、ハーバードはいつも、人——先生と学生に投資したといわれる。しかも幸なことにハーバードは、高度の教育に必要な物的資源を豊富に蓄積することができたのである。

ハーバードは、マサチュセッツのチャールス河に沿うてケンブリッジとボストン両市にわたるアメリカ最古で最新の大学といわれる。一六三六年に設立されたこの大学は、好学のジントルマン・ハーバート氏の土地と蔵書の贈与にはじまる。現在の大学は諸種の新鋭機器のなかで成長しなければならないが、一六〇〇年代の大学にとっては、土地とレンガとモルタルに、蔵書こそ貴重な資源であったであろう。三世紀半にわたって築きあげられた蔵書制度は、大学生の利用を目的に組織されている点では、世界の大学に冠たるほこりをもっている。大学の図書館制度は、ハーバード・カレッジ図書館と大学院図書諸館からなっている。大学院図書諸館は、法学、商学、医学、教育学等にわかれ、蔵書数は六百万巻といわれる。イリノイは三百万巻といわれるから約半数である。ハーバードに匹敵するのは、国会図書館、ニューヨーク市民図書館、英国博物館、フランス国民図書館の四つといわれるが、これらはいずれ



ハーバード大学経営学図書館図書貸出口

カー図書館だけを見学した。この図書館はチャールス・リバーのアンダーソン橋を渡った南部にあって、河沿いに五百メートルくらいの美しい芝生の広場を前景にしたどっしりした建物、外見の古さにかかわらず、内部は明かるく落ちついた建造物である。あいにく日曜のこととて、広い閲覧室に学生数は少なかったが、それでも熱心な利用者にはめぐまれたものである。ここの蔵書は三十八万冊といわれている。

大学図書館の開館時間は多少相違があるらしいが、通常は朝八時四十五分から深夜まで、土曜は午後五時半まで、日曜は午後二時から十時ころまで開館しているといわれるから、学ぶ学徒にとって楽園であろう。

も国の資金によるものである。

ハーバードの中央図書館はジョンストン・ゲートを通って中央のメモリアル・チャーチ広場に対置したハーリー・エルキンス・ウイデナー記念館のなかにある。ここは主として人文、社会科学系の図書館で、珍稀本類はその裏手のヒューグトン図書館に別蔵され、そのほか各学部や研究機関別の専門図書館のあることはいうまでもない。物理学系のレーマン図書館、ゴードン・マックケー工学図書館、バーコフ数学図書館、比較動物学図書博物館等々、建物と説明を聞くだけですっかりつかれてしまう。

わたしは専門の経営学部大学院のベー

1—3：'65—'66
鈴峰女子短期大学研究集報
人文・社会
A：1—8：'54—'61　欠：6
立川短期大学論集
S—A：1—15：'58—'66
大正大学　宗教学年報
6—16：'53—'66
玉川大学文学部紀要　論叢
A：1—5：'59—'64
天理大学　日本文化
A：1—45：'34—'66
欠：12—30，34—35
天理大学　芸亭
A：4—6：'64—'66　欠：5
帝塚山大学紀要
A：1—2/2：'64—'66
帝塚山学院短期大学研究年報
A：1—13：'53—'65
帝塚山短期大学紀要
1：'63
東北大学文学部研究年報
1—16：'51—'66　欠：2
東北大学　東北文化研究室紀要
A：3—8：'61—'66
欠：1，2，5
東北大学　日本文化研究所報告
2：'66
東北大学
Tohoku Psycholgica Folia
S—A：19/1—25/2：'60—'65
東北学院大学論集　英語英文
S—A：35—48：'59—'65
徳島大学学芸紀要　人文科学
A：1—15：'52—'66
徳島大学学芸紀要　教育科学
A：1—14：'55—'66　欠：10—13

東京大学　東京支那学報
A：3—12：'57—'66
東京大学　仏教文化
2/1—14/8：'46—'58
東京大学　比較文化研究
A：1—6：'61—'66
東京大学　大型計算機センター広報
B—M：3—10：'65—'66　欠：7
東京大学　宗教研究
169—171：'61—'62
東京大学　宗教と社会
A：6—7：'64—'65
東京大学　東洋文化研究所紀要
A—5：1—40：'43—'66
欠：9，10，19，25—31
東京外国語大学　語学研究所報
A：1—7：'60—'66　欠：4
東京外国語大学論集
A：1—14：'51—'66　欠：4
東京学芸大学　研究報告
A：3—18：'52—'66
東京芸術大学美術部紀要
A：1—2：'65—'66
東京女子大学　比較文化
A：2—12：'56—'66
東京女子大学　比較文化研究所紀要
A：1—21：'55—'66　欠：9
東京女子大学　日本文学
2－22：'53—'64
東京女子体育大学紀要
1：41
東京経済大学　人文自然科学論集
A—3：1—15：'62—'67
東京教育大学文学部紀要
26—29：'60
東京教育大学　漢文学会会報
A：16—25：'55—'66　欠：21—24

東京教育大学　倫理学研究
A：1—14：'53—'66
東京神学大学　神学
S—A：13—18：'57—'60
欠：17，18
富山大学　文学紀要
A：3—16：'53—'67　欠：11
宇都宮大学学芸学部研究論集　人文
S—A：1—15：'50—'65
和歌山大学教育学部紀要　人文科学
A：1—16：'50—'65　欠：2，15
早稲田大学学術研究　人文社会
A：1—15：'52—'66
早稲田大学　国文学研究
S—A：14—34：'56—'66
欠：15，16
早稲田大学　史観
41—74：'54—'66　欠：43，44，48，50—55，69，72—73
和洋女子大学　国文研究
A：1—4：'63—'66
和歌山大学学芸学部紀要
教育科学
A：1—8：'52—'59
山形大学紀要　人文科学
A：1/1—6/1：'50—'65　欠：1/3
山形大学紀要　教育科学
A：1/1—2/2；'52—'59
山口大学　文学会誌
S—A：1/1—17/2：'50—'66
欠：9/2，11/1，12/2，15/1
横浜国立大学　人文紀要
A：1—13：'52—'66
横浜国立大学　教育紀要
A：2—6：'62—'66